

クラスメイトは
あやかしの娘

いしざわかつよしあつとたきおん こ
石沢克宜@滝音子 / 著
シマノ
shimano / イラスト





夏休みなつやすみ



006

二学期ふたごき



040

学校の妖怪がっこうのようかい



074

リリの正体りりのしょうたい



124

東京へ行くとうきょうへいく



159

授業参観じゅぎょうさんかん



210

ぼくには妖怪が見える。

それは、ぼくの友だちなんだ。

ぼくが妖怪にとりつかれたのは、小学一年生のときだった。

とりつかれたっていうのは、夢中になったって意味で。

学校の図書室にあった妖怪図鑑を見て、すごいショックを受けた。

その頃妖怪のゲームが流行って、それで妖怪図鑑を手にとったんだけど、載っていたのはゲームに出てくるようなかわいいものでは全然なくて、不気味な、怖い感じのやつだったから。

でもなぜかその絵にすごく惹かれて、それから同じ作者の妖怪の本をめぐちや探して読んだ。昼休みになると図書室で同じ本を何度も何度も読んだし、親にも買ってもらった。

ぼくの部屋にはいま、妖怪の本が二十冊くらいある。

そのうち、絵を描くようになった。

妖怪の絵。

はじめは本の妖怪を真似して、次は自分の想像で妖怪を描いた。

オリジナルの妖怪、自分だけの妖怪だ。

らくがき帳はそんな妖怪でいっぱい。

想像上の妖怪たちは、ぼくの頭の中で自由に動き回る。

最初は想像してただけだったはずなのに、そのうち実際に見えるようになった。

妖怪なんていない、本当は。

あれは想像のものだ。

でも想像は、ずっとしているとそのうち形になってきて、そしていつかしゃべりだすんだ。

ぼくは一人のとき、妖怪たちと話をしながら、彼らの絵をらくがき帳に描いた。

妖怪たちは、ぼくが一人で想像したとは思えないくらい不思議な姿かたちをしていた。話が面白くて、話も聞いてくれて、悲しいことがあると心配してくれて、励ましてくれる。

ふしぎな者たち。自分だけが知っている者たち。ぼくは、ずっと想像だと思ってた。

あの子に会うまでは。

夏休み

夏休みに転校するなんて、ぼくは本当についてない。

転校する子はクラスでお別れ会をやってももらえるのに、夏休みだからやってももらえなかった。前の学校では、夏休みは八月三十一日までだったのに、今度の学校は八月二十一日まで。

十日も！ 十日も損をした！

そのぶん冬休みが長いって言われたって、夏休みの十日と冬休みの十日じゃ重みがちがう。

仲の良かった友だちとも、お別れだ。転校なんてしたくなかった。

引っ越すなんて嫌だった。どうして今引っ越さなきゃいけないの。

知らない町、知らない学校、知らないクラスメイト。

今さらそんなの、いらないよ。

ぼくは泣いた。

クラスの友だちが三人、引っ越しの日に見送りに来てくれて、そしたら別れるのがどんどんつらくなって、ぼくは行きたくないって泣いてしまった。

「仕方ないだろ、お父さんの仕事なんだから」ってお父さんは怒る。

お母さんも最初は引越しを嫌がって文句を言ったのに、今はもうあきらめたみたいでぼくの味方にはなってくれなかった。

「友だちと離ればなれになるぼくの身にもなつてよ！」

泣くことくらいしか、抗議の方法がなかった。

でも、泣いてもどうにもならない。

子供は、大人の都合に振り回されてばかりだ。

新しい町は、前よりずっと田舎だった。

林や森や畑がいつぱいあって、道は狭くてくねくねしてる。

今度の家は一軒家だった。

近所には十軒くらい家があつて、引越してきた日に一軒ずつお母さんと一緒に挨拶に回った。

どの家にも小学生はいなくて、隣の家にも中学生の女の子がいたくらい。

新しい学校で新学期が始まるまで、ぼくは友だちもつくれないんだ。

二学期の始業式まで一人ぼっちなんだ。

これだから夏休み中に転校なんてするもんじやない。

あ、ひとつだけいいことあった。夏休みの宿題をやらなくていいってこと。

だって前の学校の宿題なんか提出しなくていいんだから、やってもしょうがない。

ってよろこんでたんだけど……。

引越して三日目、転校の挨拶をするのでお母さんと小学校に行った。

「別に二学期から行くんだからいいじゃんそのときで」

って思ったけど、お母さんは勝手に決めて、ぼくを引っ張っていった。

出迎えてくれた女の先生はすごいやさしくて、前の学校にいた隣のクラスの先生にちよつと似

てた。

この先生のクラスだったらいいなあと思ったけど、ぼくは何組になるのかまだ決まってないん

だつて。

五年生は三クラスある。前の学校で一組だったからまた一組がいいな、と思ったからぼくは、

「一組がいいです」

って言ったけど、先生はやさしく笑ってるだけで、一組になれるかは約束してくれなかった。

そのかわりに山のような教科書と、国語と算数のドリルと絵日記帳をくれた。

ドリルと絵日記は二学期の最初に提出するんだって。

こんなのいらないうよ！ せっかく前の学校の宿題やらなくていいと思っただのに……。

帰り際の昇降口で先生とお母さんがなんか話してるので、ぼくは一人先に外へ出た。

日差しは夏だけど、風は涼しい。

日光のガンガン当たるグラウンドには誰もいなくて……いや、一人いた。

グラウンドに一人、女の子が横切ってるのが見えた。

こここの生徒かな？

何年生なんだろう……？

見た感じは高学年、背が高いから六年生かな……。

なんて見ていたら向こうもこっちに気づいて目が合った。

別にやましいことがあるわけじゃないけど、なんだか目をそらしてしまった。

視線をそらした先の日陰に残像が、彼女の肩に乗った髪と、透き通るような真っ白いブラウス

と、風にひらひらなびいてるスカートと、長い脚と。

「行くよ」

つてお母さんがぼくを追い越していったので、置いていかれないように大股で歩き出す。

お母さんと一緒に恥ずかしくて、少しだけ距離を取りながら女の子の方をちら見したら、彼女は笑顔で手を振ってきた。

えっ、それぼくにだよね？ ぼくに向かつて手振ってるんだよね？ うしろにあの子の友だちの女子がいるとかないよね？ つてちよつとオーバーなくらい周囲を確認してから、控えめに手を振り返した。

ぼくは女の子と笑顔を交わして、それから小走りでお母さんを追いかけていった。

このとき、ぼくはどうして、どうしてお母さんのあとについて学校から出てしまったんだろうって、家に着いてからものすごく後悔した。



彼女は手を振ってくれたんじゃない。

で、ぼくも手を振って、二人で笑いあつたじゃん。

友だちになれたかもしれない絶対！

ぼくはそのあと何の用事もなかった！

だったらあのとき「お母さん先帰って」って、女の子のところへ行つて、せめて名前と学年とクラスくらい聞いておけばよかったじゃん。もしかしたらそのあと二人で近くを歩いたりして、女の子が町を案内してくれたりしてとか、ありえた！

後悔、激しい後悔……！

未練をだらだら垂れ流しながら、ぼくは一旦帰つた家をすぐに飛び出して学校へ走つた。走りながらぼくは考えた。

ぼくとお母さんが学校を出て、家まで十分くらいかかった。家には五分くらいいた。今から走つて学校行つたら五分……とはいわないけど七、八分とか？

問題です。ノゾミくんが学校を出て家に帰つてまた戻ってくるまで、合計何分かかったでしょう？

そのあいだ、あの女の子が一人でグラウンドにずっとい続ける……わけないか。

いやそんなのわかんないじゃん、三十分くらい、いることだってあるよ。

全速力で走って学校着いて、半開きの通用門から中に入って、ぼくは息を切らしてグラウンドに出てあの子の姿を探した。

そこに、誰の姿もなかった。

夏の日差しと、涼風に舞い上がったグラウンドの砂がぼくに降り注ぐだけだった。

朝食は、パンと、目玉焼きと、ポテトサラダ。

サラダはスーパーのパックのやつで、お母さんが目玉焼きを焼いた。

パンにマーガリンを塗るのはぼくの仕事だ。

いただきますをして、半熟の黄身に口をつけてちゅーちゅーしてお母さんに怒られる。

お父さんは仕事に行く。お母さんも今日から新しい仕事に行くらしい。

夏休みのぼくはやることがない。今日は何をして過ごそうかな。

「宿題があるでしょ？」

「やってるよ」

嘘だけど。

「朝の涼しいうちにやっておきなさい」

この町は午後だつて涼しいじゃん、前に比べたらさ。

「絵日記は？ 書いてるの？」

「え……まあ」

絵日記なんて前の学校でも夏休みに宿題ででたけど、毎日そんなに絵に書くような出来事なんてあるわけではない。

「ノゾミは絵日記得意でしょ」

お母さんは適当なことを言う。

「別に得意じゃないよ」

「いつも絵、描いてるじゃない」

「絵日記の絵とはちがうの」

全然わかってない。

お母さんはぼくが描いてる絵になんて興味ないんだ。

ほんとは絵なんて描いてないで勉強してほしいと思ってる。

ぼくが描いてるのは、妖怪の絵だ。

お母さんが見たら、顔をしかめるにちがいない。

国語と算数のドリルは手付かずのまま、ゲームをやって午前中がつぶれた。

この家は前に住んでたマンションよりも広くて、天井が高くて、窓を全開にすると風が通って、畳の上で横になると気持ちがいい。寝転んだまま、絵日記帳を広げた。

昨日のページは白紙のままだ。

お母さんと初めて学校に行ったことを書くこうとして、色鉛筆で学校のグラウンドを描いたところ、あの女の子の笑顔が浮かんできた。

ぼくは、お母さんと自分の姿ではなく、あの子の立ち姿を描きはじめていた。

女の子なんて描いたことなかったから、全然うまく描けない。

途中でぐじゃぐじゃやってしてそのページをやぶった。

ぼくが描けるのは妖怪の絵だけなのか。

絵日記帳を閉じて、仰向けに寝転がって、壁の時計を見る。

もうすぐ一時半、昨日女の子と会った時間だった。

「あ……」

ぼつ、と起き上がった。

もしかしたら、あの子は今日もグラウンドに来るかも。

ぼくは大急ぎでリュックに絵日記帳と色鉛筆とスマホを突っ込んで、外へ飛び出した。お母さんがごはん代を千円くれたから、それもポケットに入れた。

小学校のグラウンドには、昨日は誰もいなかったのに今日は生徒がいっぱいいて、サッカーをやっている。

先生かコーチかわかんないけど男の人が笛吹いて、それに合わせて二人ペアでボールをパスし合っている。

あの子はいなかった。

まあ、当たり前だよね……。

男の人がぼくの方へ近づいてきた。

「君、何年生？」

「五年です」

「ん？ 五年？ 何組？」

「あ、あの……」

転校生つてばれたくなくて、ぼくはどう答えようか考えたけど、うまい答えが出てこない。笛がやんだので、パスが止まってる。

みんな一斉に「誰？」って感じでぼくを見てる。

「サツカーやってく？」

その言葉を聞き終えないうちに、ぼくは全速で逃げ出した。逃げる必要なんてまったくなかったけど。

「あ、ちよつと！」

男の人の声がうしろから聞こえたけど、振り向かずには走る。

門を出て、学校に沿った道を、家とは反対方向に走った。

家の方角を知られたくない、って思ったから。

別にそんなこと、意味なんてないのになんでそんなふうに思ったんだろう。

ばかみたい、と走るのをやめた。

舗装された道を、ガードレールに沿ってとぼとぼと歩く。

学校から離れると、ガードレールの外側は畑が増えていく。反対側にはコンクリートブロック

の壁が延々と続いて、その上に覆いかぶさるみたいに木が生えている。

道沿いにいきなり建つてるコンビニで、ぼくはコーラとおにぎりとチョコレートを買った。

コンビニの前のベンチでおにぎりを食べて、チョコを口に放り込んで、コーラで流し込む。胃の中が炭酸でいっぱいになって、なんだかお腹が苦しい。

ふと道の先を見ると、コンクリートブロックの壁が途切れて木の鳥居が立っていた。

前の家の近くにもあんな感じの鳥居があつて、奥に神社があつて、その裏の林で蝉やカブトムシを捕つたつげ。

その神社では、妖怪たちとよく遊んだ。

そういえばこの一週間くらい、引越しの慌ただしきで妖怪のことなんてすっかり忘れていた。

ひさしぶりに妖怪たちと遊んで、絵を描こう。

そう、ぼくには妖怪という友だちがいる。

彼らはぼくが想像すれば、いつでも現れてくれるのだ。

さすがに絵日記帳に妖怪は描けないので、コンビニでらくがき帳を買って、鳥居へと歩いた。

塗装がぼろぼろに剥げた鳥居をくぐると石段があつて、ぼくは息を切らして上りきった。

午後の太陽の光は生い茂った樹々の葉に遮られて、境内は薄暗い。

すつごいでつかい木がある。神社にはだれもない。

ぼくは神社の建物の角に座つて、らくがき帳の白い紙に絵を描きはじめた。

たまに散歩のおじいさんとか、走つてるおばさんとか来て、庇にぶらさがった鈴をからから鳴らしてばんばん手を叩いていく。

すみっこに座つて絵を描いてるぼくのことをそんなに気にしないし、たまに覗き込んでくるおばさんとかいるけど、ぼくの絵を見たら行つてしまう。

ぼくの絵が変だから、みんな変な顔して離れていく。

神社を囲む林のところに妖怪が隠れてる絵。

木の陰に妖怪がいるんだよ、こつち見てるよ、なんてね。

絵を描くの夢中で、うしろから誰かが近づいていたのなんて全く気づかなかつた。

「きみ、妖怪見えるの？」

振り向くとほつそい木の枝みたいなおじいさんが、ぼくの絵を覗き込んでた。

「あの、見える、ていうか、これは、絵なので……」

「絵はわかつてるよ。妖怪が見えてるのかつて、聞いてんだよ」

何言つてんのこのおじいさん。

顔はしわしわなのに頭はつるつる、耳のあたりにごま塩みたいな短い髪の毛がふりかけてあって、その割に髭はすごい長い。

「これは想像ですから……」

「なんだー。きみ妖怪が見えてるのかと思つたよー」

ぼくにはおじいさんが妖怪に見えるけど。

「妖怪なんて、いないですよね」

「それがね。いるんだよここ、妖怪」

「そうですか」

あんまり関わらないようにしとこ。

「あつ、信じてないなつ」

おじいさんは大げさにのけぞつた。

「いえ、そんな、まあ」

「あんまりここに子供来ないのは、妖怪が出るつていつてな。みんな怖がつて近づかないんだ。大人は平気だけどね。妖怪なんて見えない



からね」

おじいさんはあらためてぼくの絵を見た。

そうじつと見られるとなんだか恥ずかしくて、でも閉じちゃうのもなんだし、どうしようこの状況。

「うまいもんだね」

「そんなことないです」

「俺もきみくらいのがきんときには妖怪が見えてたんだけど、そのうち見えなくなってしまうたな」

「そうですか」

「そうだよ」

「そうですか……」

「あつ、信じてないなっ」

またのけぞる。

「いえ、ていうか、でも今は見えないんですよね」

「今は見えないよ。新聞の字も見えないし。なんだろうあの、スマホとか、あんなん字ちっちゃく

て虫眼鏡で見ないとわからんし。まあ見えたところでそんな使えないんだけどな」

ぼくの絵の、妖怪の一つを指差した。

「知ってるよ。この妖怪」

「まじですか」

空にひらひら舞う長い布。

まあ、有名だからね一反木綿は……。

「背中に乗って空飛んだことある」

「まじですか……」

「うんまじまじまじ」

嘘でしょ。それは嘘でしょ。

「昔、この境内で、よくかくれんぼをした。その頃はこの神社ももつと建物があつて、隠れるとこがいつばいでな。俺は隠れるのがうまくて、でも妖怪たちはもつとうまくて、なかなか見つからないだけどき。あいつらズルいんだよ、姿消せるんだよ、反則だろそれ」

どこまで本気で聞いたらいいのかわかんないよ……。

「一人、仲のいい妖怪がいたんだ。同い年くらいの子供の妖怪だった。なんつったつけない、着物

を着た、ちっちゃい子供でさ」

「座敷童子かなあ？」

「そう！ 座敷童子！ 座敷童子のいる家は栄えるって言い伝えがあつてな、だから家に来てほしくて何度も誘ったんだけど、この神社から出ないんだよ。俺は中学に入って、しばらくここに来なくなつて、久しぶりに来たときにはもういなかった。ずっと、探したんだけどね。それつきりだよ」

どこまで本気で言ってるのかわからない。

でもおじいさんは真顔で、なつかしそうに樹々を見上げる。

とうりりりりりり……。

スマホが鳴った。思わずぼくはリュックをさぐつたんだけど、鳴ってたのはおじいさんのスマホだった。

「はい。……なんだまだいいじゃないか。……晩飯？ まだそんな時間じゃないだろう……徘徊じゃない散歩だ！」

おじいさんが話してる隙に帰っちゃおうかな。

ぼくはらくがき帳をそつと閉じて、色鉛筆をしまう。

「買い物？ ……ああ、じゃあ買うものLINEしといてくれよ。忘れるから」

「なんだよジジイめっちゃスマホ使いこなしてんじゃん……」

「あ、ちよつと待って。きみ、もう帰るの？」

「目ざとく見つかつてしまった。」

「はい。そろそろ」

「そうか。またここに来なさいよ」

「はい」

「きみなら、妖怪たちとも仲良くなれるよ」

「変なおじいさんだな……」

「ぼくはリュックを背負って、階段を下りる間に振り返ると、おじいさんはいなくなってた。」

「え」

「たった今までスマホで話してなかった？」

「ぼくは逃げるように階段を駆け下りた。」

「なんでだろう。怖いつていうわけじゃないけど、一刻も早く神社から離れようと思った。」

「あのおじいさん、ほんとに妖怪なんじゃないの？」

でも妖怪はスマホ持たないか。

次の日の午後も、別におじいさんに言われたからじゃないけど、らくがき帳と色鉛筆を持って神社へ行った。

近所を歩いて、公園とか行ってみただけどぼくと同じくらいの歳の子たちがベンチでゲームとかやって、外を歩いただけでじろじろ見られて入りにくいし、学校にも寄ったら今日は野球やって門からグラウンドを覗いただけで離れた。

あの子がいるかも、なんていう期待も外れて。

ぼくは町にも学校にも受け入れられてない感じがして、居心地が悪かった。

自然と足は昨日の神社へと向く。

石段を上りきると、そこには不思議な光景が。

境内で妖怪たちが、そこらじゅうを駆け回っていたように見えたのだ。

えっ、と思っで見ると、その中心に一人の女の子がいた。

グラウンドにいた、あの女の子だった。

ぼくはびつくりして、その場で立ち尽くしたまま、ポカーンと彼女を眺めていた。

こんなところで再会したのもそうなんだけど、そんなことよりぼくが驚いたのは、女の子が妖怪たちと遊んでいるように見えたから。

女の子はぼくを見つけると、一瞬驚いたような顔をした。

妖怪たちは、散り散りになって社の軒下や木の陰に隠れた。

彼女はあのと時のように笑顔を見せてはくれなくて、眉をひそめてぼくを見てる。

一昨日とはちがつて髪をうしろでひとつにまとめて、Tシャツにショートパンツっていう身

軽な服装。

地味な色合いの境内の中に、彼女のまわりだけ鮮やかに色がついて見えた。

「学校のグラウンドで……」

言いかけたら、女の子が近づいてきた。

まっすぐ、ぼくを見ながら。

そして目の前で立ち止まった。

彼女の目は大きくて、瞳が少し赤っぽい。

ぼくより背が高かった。

「……きみ、見えるの？」

女の子が言った。

「……見えるって、何？」

「妖怪」

「えっ……」

たしかに彼女は妖怪たちと遊んでいたように見えたけど、実際は一人で遊んでいて、妖怪たちはぼくのいつもの想像で、たまたまそんなふうに見えていただけなのでは？

ぼくは隠れている妖怪たちのほうに目を向ける。

みんな軒下や木陰から様子をうかがうようにこつちを見てる。

「見えるんだね！」

女の子は、ぽつと笑顔になった。

「どうして見えるの？ みんなは見えないのに」

「どうして、そんなこと言うの？」

「あたしが聞いているの。どうして見えるの？ ねえどうして？」

「わかんないよ、そんなの……」

だって妖怪は、ぼくだけに見えるっていうかぼくの脳みそが作り出したものなわけだから、そ

れが他の誰か、例えばこの女の子に見えてるとかありえない。

「ということは、きみも妖怪が見えるってこと？」

直球で聞いたけど、女の子は「んふふつ」と意味ありげに笑った。

「人間の子供だよね？」

「ぼく？ 当たり前じゃん」

「人間の子供なのに妖怪が見えるなんてすごいよ。びっくりした。見える人にはじめて会った」

「ぼくだけだと思ってた。妖怪が見えるのは」

「ぼくが考えた、ぼくだけの世界だと思ってた」

「ちがうんだ。妖怪が存在する世界があった、

ぼくにはそれが見えていたんだ。

そして、他にも見える人がいるんだ……。



「いままで誰にも言えなかつたの。よかつた、話せる人ができて。うふふふつ」
笑うと唇の端に小さな八重歯がのぞく。

彼女は振り向いて、境内のあちこちに隠れている妖怪たちに呼びかけた。

「おいで。怖くないよ」

妖怪たちはおずおずと出てきた。

「一緒に遊ぶ？ みんなでかくれんぼしてたの」

「かくれんぼ？ 妖怪と？」

「あと一人見つからないの。一緒に探して？」

「いいけど……」

ぼくは言われるまま、妖怪かくれんぼに参加することになった。

二人で境内の木の陰とか草むらとか、寄ってくる蚊を振り払いながら、

「いない！」

社の軒下なんかを探して、

「いない！」

「いない！」

どんな妖怪なのって聞いたら、

「こびとなの！」

って答えた。

彼女は活発で、ぼくなんて置いてかれそうなくらいすばしっこくて、高いところからも平気で飛び降りる。

二人で遊ぶのは楽しかった。彼女に振り回されるのも楽しかった。

「ねえ、きみ、名前は？」

急に聞かれた。

「ぼくの名前は和泉ノゾミ」

「ノゾミくん。あたしは森沢リリ」

「リリちゃん……」

何年？ って聞こうとしたけどやめた。

もし六年だったら話しくくなっちゃいそうだし。

「あつ、また刺されてる」

リリは白い太腿をぼくの目の前で持ち上げて、膝の上あたりをガリガリ掻いてる。

「あーここもだ」

今度は体を捻ってふくらはぎのあたりを搔いた。

リリの手足は細くて長くて動きがきれいで、蚊に刺されたところを搔いてるだけなのに、ぼくはその姿に見とれてしまった。

「どうしたの？」

「別に」

「口あいてる」

「あ、ぼく虫除けスプレー持つてるよ」

見とれてたのを悟られないように話題を直角に曲げた。

「貸して」

ぼくが差し出した小さな缶をリリが手にとるとき、指が触れた。少し汗ばんだ、細い指。

「うっは、冷たい」

リリは笑いながら、腕と脚に、そして服の上にもシューシュースプレーしてる。

「背中やって」

と、リリはスプレーをぼくに返して、背中を向けてきた。

「え、服ふくに？」

「うん。ぶわーつとやつちやつて」

「う、うん。ぶわーつとやる」

スプレーを構かまえると、リリは背せにかかった束ね髪たばがみを両手りょうてで、うなじが見えるくらいにまで掻かき上げた。

リリの髪かみからいい匂においが、風かぜにのつて通り過とぎていく。

「いくよ」

水色みずいろのTシャツの上うえに、スプレーを吹ふき付つける。

リリの匂においを虫除むしよけのスプレーが掻かき消けした。

スプレーの霧きりがうなじにかかつて、

「あはは、冷つめたい」

リリは肩かたをすくめる。

首筋くびすじに、細ほそい髪かみの毛けが貼はり付ついてた。

そのあともこびと妖怪ようかいは全然ぜんぜん見みつからなくて、でも楽たのしくて、ひとしきり探さがしてもやっぱり見みつからないんだけど、二人ふたりで駆かけ回まわる神社じんじやは貸かし切きりの遊園地ゆうえんちだった。

「もうー、降参。おしまい。でてきてー！」

リリは空に向かつて言った。

彼女の声が樹々に吸い込まれる。

「あつ」

リリが屋根の上を見た。

「ポツクル！ そんなとこにいたの？ ずるいよー。屋根とかありー？」

リリが悔しそうに言った。

ポツクル？

「……お前から探すところワンパターンなんだよ。そんな下ばかり見てよー」

上から声がした。

見上げると、神社の屋根の端にちっちゃい子供が座ってる。足をふらふらさせて。

子供っていうか、小人。

「ポツクルはね、ちよつと口が悪くてね、ほんとはいいやつだから」

リリが耳元で囁いた。

「さつきからいるけどなにそいつ」

ポックルがぼくのことを見下ろして言った。

「この子も、みんなのことが見えるんだよ！」

「あー、あるある。リリの気を引こうとして俺たちが見えるとか言っただけで実際は見えてないパターンな」

ポックルはぼーんとジャンプすると一回転してぼくの前にすとんと降りた。

なんて身軽なやつ……。

「だって見えるんだもんしょうがないじゃん」

小声で言い返してみた。

「なにつ、お前つ、俺の声が聞こえるのか！」

「だからさつきから言ってるでしょ……」

「リリ！ こいつ、俺のことが見えてっぞ！」

ポックルはとつてもちっちゃい。

幼稚園の子供くらいの背丈だけど、でも頭がでかくて三頭身くらいでバランスが変。でっかい目をギョロギョロさせてぼくのことを下から見上げてくる。

「こいつ人間の子供？」

「あたしの友だちなの」

「おいお前、名前は？」

ポツクルが額をこすりながら言った。

「和泉です」

「名字じゃねえよ下の名前だよ」

「ノゾミです」

「よしノゾミ。俺とお前はもう友だちだ。ノゾ

ミって呼ぶぜ。俺のことはポツクルって呼んで

いいからな。リリのことならなんでも聞いてく

れよ」

「え？ なんでも？」

「そりやお前、あいつがガキの頃から知ってる

からよ。一緒にお風呂入った仲だからよ」

「えっ……」

「ポツクル！」



リリがポックルのデコを中指でピン！ と弾いた。

「いつてえ、なにすんだよ」

ポックルが額をこすりながら言った。

ぼくたちはそれから夕方まで境内で遊んだ。

ときどき神社にやって来る大人たちには、小学生が二人ではしゃいでるように見えると思う。

でもぼくたちには一緒に遊ぶ妖怪たちの姿が見えていて、彼らとケードロをしていたのだ。日が陰って、蚊も増えて、そろそろ帰らなきゃって時間。

「楽しかった。また遊ぼうね」

リリは手で汗を拭いながら笑顔で言った。

「またって、いつ？」

「いつだろう。いつか。また」

「LINE交換する？」

「あたしスマホ持ってないの」

「じゃどうしよ……」

「またここに来れば会えるよ」

「会えるかな……？」

「うん。会えるよ」

「じゃ、明日も来る。明日また遊ぼう」

リリはそれには答えずに、

「じゃあまたね！」

つて手を振って、妖怪たちと一緒に林のほうに走っていった。

え、帰りそっち行くの？ 林の奥の方へは細い道が、山の上まで続いている。

この上に家があるのかな？

気になったけど、そんなことよりぼくはリリと友達になれたことがうれしくて、残りの夏休

みへの期待で胸がいつぱいになった。

その日の絵日記にはリリをがんばって描いてみた。全然似てなかったけど。

妖怪たちと、屋根の上にポックルも描いちゃったけど、まあいいか。

次の日。

なんだか落ち着かなくて、朝ごはんを食べてから時間を持って余したのもあって、昨日よりかなり早い時間に神社へ行つた。

リリは来てなくて、ぼくはらくがき帳に絵を描いて待つことにした。早く来ないかな、ってそんなことばかり考えて、絵が全然進まない。

色鉛筆は白い紙の上でいつまでも迷子になつた。

昨日リリが帰つていった小道のほうが気になって、ちらちらと目が行ってしまふ。あきらめてらくがき帳を閉じようとしたとき、うしろから声をかけられた。

「あれ、今日は描かんのか」

おじいさんだった。

「あ、こんにちは……」

「なんだそのしよぼくれた顔は」

ぼくがよほど浮かぬ顔をしていたのだろう。

「別に……」

「きみは一人で絵を描いてるけどさ、友だちいないの？」

おじいさんは遠慮なした。

「いるよ友だちは。いるけど、ぼくは絵を描きたいからここに来るの。だって絵は一人で描くものでしょ」

ぼくはいつのまにかおじいさんにタメ口きいてる。

「じゃあ俺が友だちになつてやろうか」

「別に」

「LINE交換しようぜ」

なんでそんな前のめりなおじいさん……。

ぼくは山の方へと続く小道を指差した。

「あの道ずつと行ったら、なにがあるの？」

「あの道の先か？ 別になにもないよ」

「なにもないのに道があるなんて変だよ。おじいさん、行ったことないの？」

「昔、あの奥には祠があったな。でもあんまりにもポロポロになったつてんで、取り壊したん

だ。中に祀つてたご本尊はほれ、こつちに入つてるよ今」

おじいさんは神社の建物を親指立ててくいつ、と指した。

「だから行き止まりなんだよあの道」

「エッ！ 行き止まり!?」

「え、そんな驚く?」

「だって……あ、わかんない。あー、行き止まりなんだ……」

リリはあの道を、どこへ帰っていったんだろう……?

そのあとおじいさんは、また電話で呼び出されて帰っていった。スーパーで買い物してきてつて頼まれて。

ぼくは夕方まで境内にいて、絵を描いては消して、描いては消してを繰り返していた。

リリは来なかった。

その次の日も来なかった。

その次の日も。

夏休みが終わるまでに、ぼくは毎日神社に行ったけど、とうとう一度もリリには会えなかった。

ぼくの絵日記は、神社ばかりになった。